

東魏北齊鄴城の内城の成立について

朱 岩 石

古代中国の都城において、内城とは宮城と外郭城に相對するいわば二重目の城壁である。北魏洛陽城の宮城・内城・外郭城の三重の城壁構造はすでに考古調査により実証されている。また前漢長安城や後漢雒陽城のような北魏洛陽城より早い時期の都城は、宮城外に二重目の城壁を持つが、その城壁は内城に属すかどうか不明で、その外周に外郭城があるかどうかはなお大きな論争の的である。北魏洛陽城の内城の出現から、隋唐長安城の皇城の形成までに、内城から皇城への変遷の過程を見出すことができる。東魏北齊時代の鄴城はこの変遷過程の中間に位置し、鄴城に内城が存在するかどうかは注目に値する問題である。

中国社会科学院考古研究所と河北省文物研究所は鄴城調査隊を共同で組織し、一九八三年より鄴城遺跡において全面的な調査を行った。その結果これまで曹魏十六国時代の鄴北城、東魏北齊鄴南城遺

跡に対して基礎的な認識を得ることができた。本論では発掘調査によって入手した資料に基づき、また関連する文献と対比して、鄴南城遺跡の内城の性質およびその構造に関して考察を行い、鄴南城遺跡が東魏北齊時代の都城の内城であることを論証する。

一、東魏北齊鄴城について

鄴城遺跡は曹魏十六国時代鄴城（鄴北城）と東魏北齊時代鄴城（鄴南城）を含んでいる。天平元年（五三四年）北魏は東魏、西魏に分裂し、大丞相高歡はわずか十一歳の元善見を帝位に就けた。すなわち東魏孝静帝であり、同年十一月鄴城に遷都した。鄴城は前燕王朝滅亡から一六〇年後に再び国都となった。この時、鄴北城はすでに荒れ果ており、加えて洛陽より「戸四十万」の民衆が移り住み、

京都の拡張、新築の問題は非常に差し迫っていた。⁽¹⁾天平二年(五三五年)北城の南に南城を増築し、その規模は「東西六里、南北八里六十歩」をなし、この城は一般的に鄴南城と称される。鄴南城の造営は尚書令右僕射高隆之が責任者として行い、施工設計に参加した者には辛術・李業興・張熠などがいた。⁽³⁾鄴南城の建設計画は「上則憲章前代、下則模写洛京」という原則によって行い、北魏洛陽城を模して造営されただけでなく、その宮殿の建築材料は北魏洛陽城を解体して鄴南城へと運ばれ、使用された。⁽⁴⁾設計者たちはある程度北魏洛陽の建設に携わっていたが、鄴南城を新しく造営する際には基本的にかつての城市の制限を受けず、鄴南城の計画と建設に対してより十分に意図や構想を表現することができ、これによって鄴南城の平面配置などはさらに完全なものへと整えられた。

発掘調査の成果により、鄴南城は長方形を呈し、その規模は東西約二八〇〇メートル、南北約三四六〇メートルであり、その城壁は黄土を突き固めて造られていることが明らかになった(第一図)。

鄴南城の東、南、西城壁は新らしく造営され、北の城壁は鄴北城の南壁を借用している。新築の城壁は真直ぐではなくやや曲っており、城の東南隅と西南隅角は隅丸を呈する珍しい形状である。城壁は幅七〜一〇メートルである。また防御目的のため、東、南、西城壁の外側には「馬面」施設が等しく分布し、現在五〇基を検出している。馬面の平面形は長方形を呈し、幅は約一八メートルであり、突出した城壁の長さは約一二メートルである。城東壁外の馬面間の

距離は一般的に約八五メートルであり、南壁、西壁外の馬面間の距離は一般的に約九五メートルである。⁽⁵⁾

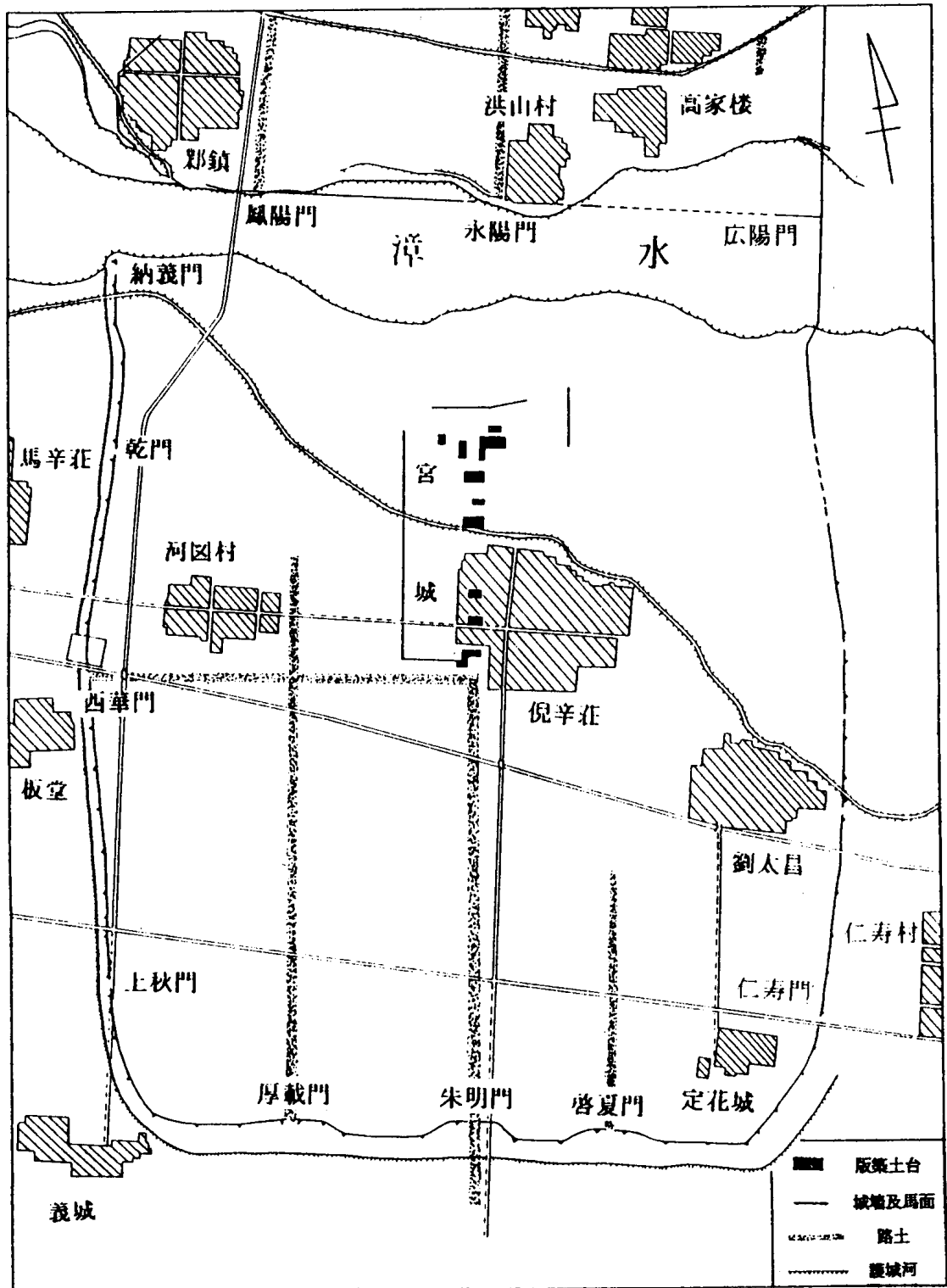
記載によれば、新築の城門は十一門であり、東西の城壁には各四門、南の城壁には三門ある。⁽⁶⁾南城壁の中心に朱明門があり、その東に啓夏門があり、西には厚載門がある。東壁は南より北に仁寿門、中陽門、上春門、昭徳門があり、西壁は南より北に上秋門、西華門、乾門、納義門がある。このほか北壁の城門は本来の鄴北城の南壁にある三門の城門を引き続いて利用し、中央が永陽門、東が広陽門、西が鳳陽門である。ボーリング調査と発掘調査により、一四門の城門の位置が基本的に確定した。

鄴南城の城壁外には濠がめぐっており、基本的には城壁と平行している。東、南城壁との距離は一二〇メートルであり、西城壁との距離は比較的近く二八メートルである。濠の現存幅は約二〇メートル、深さ約一・八メートルである。

宮城は鄴南城の中央からやや北部に偏っており、『鄴中記』の記載によれば「東西四百六十歩、南北連後園、至北城、合九百歩」である。調査により、宮城の規模は東西約六一〇メートル、南北約九七〇メートルであると確認されている。宮壁は土を突き固めて建造し、その幅は約七メートルである。このほかに宮城の正南門の位置が確認されている。

また鄴南城の道路交通システムは中国都城の伝統的な経緯垂直の道路交通システムを採用している。その道路網の中で、城の中軸線

東魏北齊鄴城の内城の成立について



図一 鄴南城遺跡実測図（郭の縦線は真子午線）
 （『河北省臨漳鄴南城遺址勘探与発掘簡報』より）

の朱明門大道を縦方向の基軸とし、西華門から中陽門の大道を横方向の補助軸線とし、両軸線の交点は鄴南城の正に中心となっている。この箇所ので広い範囲にわたって路面遺痕が発見されており、宮城前広場であると考えられる。この空間は明らかに儀礼の効能を有しており、隋唐長安城皇城內、宮前広場の祖型であろう。鄴南城の道路はこれを座標軸として計画設計が進められたのである。

文献に記載された城門から、東魏北齊鄴城は南北大道三条、東西大道六条、すなわち九条の大道があることがうかがえる。現在発掘調査によってすでに六条の大道が確認されている、即ち南北方向の朱明門大道、啓夏門大道、厚載門大道、及び東西方向の上秋門から仁寿門に至る大道、西華門から中陽門に至る大道、乾門大道である。東西大道の中の上春門大道、納義門大道、昭徳門大道は未発見である。発見された大道の中で朱明門大道の規模が最大であり、その現存する長さは一九二〇メートル、幅約三八・五メートルである。その他の大道の現存する幅は一般的に六〇メートルである。

鄴南城の道路は朱明門大道を中軸線として基本的に東西対称であり、西華門から中陽門に至る大道は等しく南北両部分に分かれ、北半分の道路密度は南半分より高い。鄴南城大道は真直ぐに伸びており、道路網は整っている。文献記載では、朱明門の両側には十歩一株として大きな槐（エンジュ）の木が植えられ、樹木が良く茂って陰をつくり、樹下の溝には水が大量に流れていたという。この大道には北へ向う延長線上に止車門、端門、閭闔門、太極殿、朱華門、

昭陽殿、五樓門などの重要な宮城建築があり、城全体の中軸線を形成している。朱明門大道の計画的な設計からもこの中軸線が都城計画の中で最も重要であったことがうかがえる。

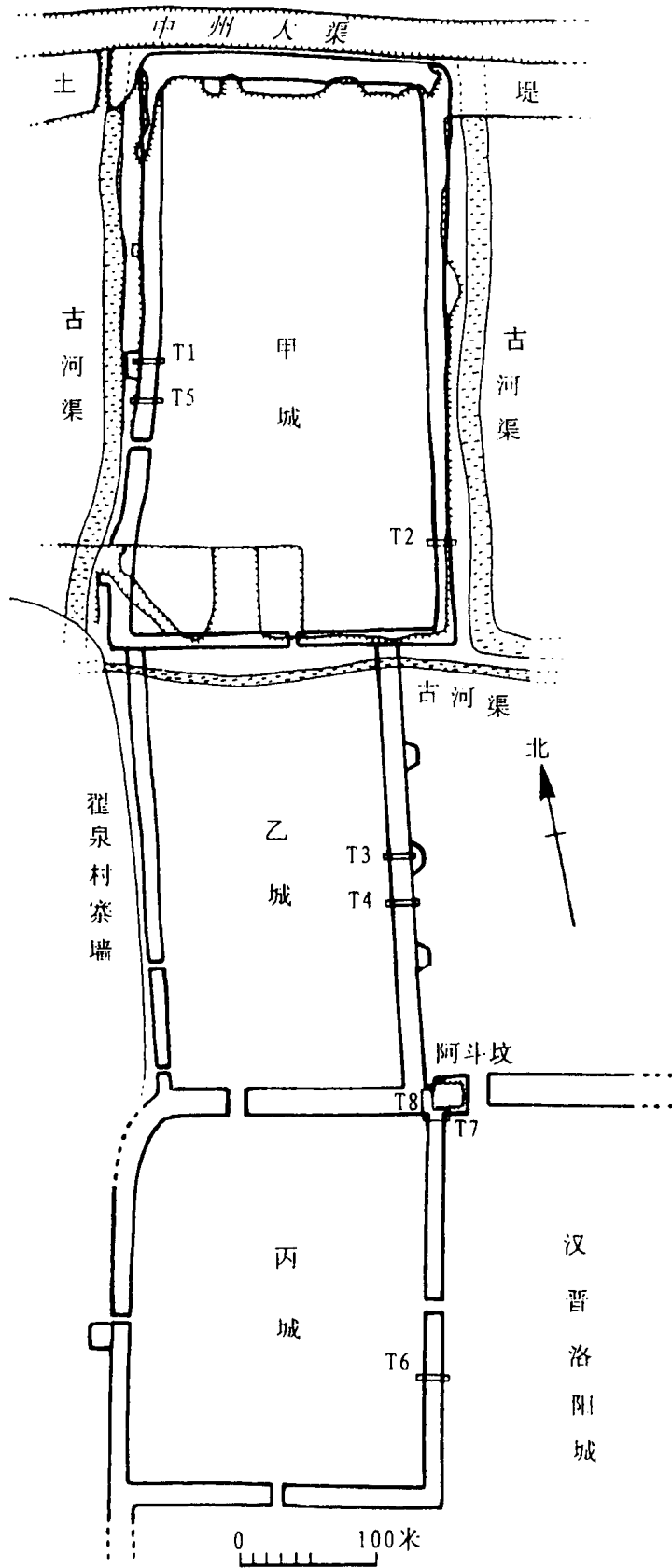
二、鄴南城と北魏洛陽城との比較

一 北魏洛陽城内城の平面配置の再認識

北魏洛陽城内城は大城とも呼ばれ、その平面配置はすでに学会に良く知られていて述べるまでもない。しかし、内城が西北隅に突出した金墉城甲・乙城を含むかどうかという問題は、北魏洛陽城内城の平面配置に関わってくるので、ここで簡単に検討したい。

一九九五年と一九九七年に行われた金墉城の発掘成果により、発掘者は金墉城内城の造営時期は曹魏時代であると言う結論を出したが、曹魏時代の金墉城は甲・乙城を含まないことが明らかであり、魏晉洛陽城の平面配置において西北隅に金墉城の甲・乙城は無かったと言える。しかし発掘報告では、金墉城甲・乙城の年代については幅を持たせ、その時代は北魏から隋末までと考えている。この問題は内城の防衛システムと関連することだけでなく、北魏洛陽城の平面配置にも関連している。金墉城の発掘資料の分析により、金墉城甲・乙城の年代についてさらに詳しい結論を得ることが可能だと思われるので、若干検討する(第二図)。

発掘した金墉城甲・乙城城壁の版築内には北魏時代の遺物が含ま



図二 漢魏故城金墉城の平面図とトレンチ位置図
(『考古』1999年3期より)

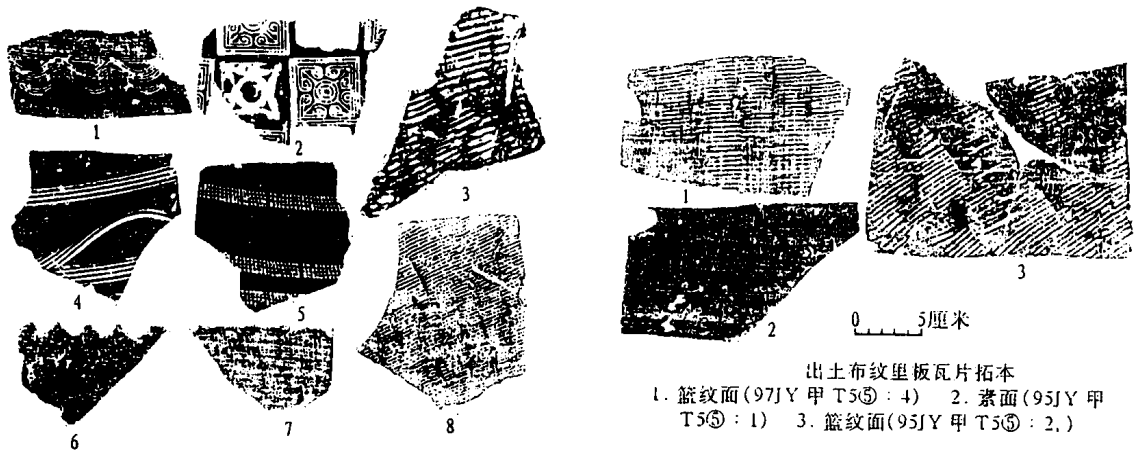
れ、城壁の基底部へ近づくほど北魏時代の遺物は豊富になる。甲城の西城壁のT五トレンチには代表的な文化層があり、城壁と各時代の文化層の関係をよく示している(第三図)。T五トレンチのセクション図によると、甲城の西城壁の版築上に第一層から第三層までの地層があり、これらの年代は甲城城壁の時代より新しい。甲城の西城壁は第四層、第四層下の路面層、第五層及び四つの灰坑(番号がH一、H二、H三、H四)を破壊している。これらは甲城城壁の時代より古い時期の文化層である。四つの灰坑は北魏時代に属し、その中のH三、H四が第四層、第四層下の路面層に破壊されている。発掘概報によると第五層の時代は北魏前後であり、第四層の時代は北魏より古くなく、第四層下の路面層の時代も北魏前後であると結論づけている。

出土遺物から判断して四つの灰坑の時代が北魏に属すると言う結論に賛成するが、その他の地層の時期は更に具体的に推定することが可能であろう。第四層下の路面層は北魏時代の瓦破片と青磁器破片等を含んでいるため、その時代は北魏より新しく、北朝末期と考えられる。第四層の厚さは二〇〜一一〇センチであり、それは短期間に形成したものでなく、北朝末期から隋代までの時期に属すると考えられる。つまり甲城城壁の建築年代は北朝末期から隋代までの時期であることが明らかであり、北魏洛陽城と全く関係がないと言える。甲城西城壁の基槽を掘る時に第四層を掘り込んでおり、その底部の深さは第四層下の路面層より少し深い。そのため甲城城壁の

基礎部の版築には路面層中の遺物が大量に混入しており、城壁の基礎の底部から大量の北魏時代の遺物が出土する状況になっている。また乙城城壁の文化層の状況は甲城と基本的に一致しており、その建造年代は北魏洛陽城より新しいことが明白である。

以上の結論は、文献記載を正確に理解する上でも妥当である。例えば『河南志』卷二引用の『洛陽記』に「洛陽城内西北隅、有百尺楼、魏文帝造」とあり、北魏の酈道元の『洛陽伽藍記』卷一に「金墉城東北角有百尺楼、年雖久遠、形制如初」とある。北魏時代に金墉城甲・乙・丙城が全てあるという結論に基づく「百尺楼と金墉城の相対位置に関する記載が理解し難い。すなわち、『洛陽記』に記載された百尺楼は曹魏洛陽城西北隅の内側あるいは城壁の上に位置している。しかし『洛陽伽藍記』に記載された百尺楼は金墉城甲城の東北隅の内側あるいは城壁上に位置しており、この位置は曹魏洛陽城の外側である。最近の金墉城の発掘によって、百尺楼遺構は北魏洛陽城内城の西北隅の北城壁上に位置し、この位置がちょうど金墉城丙城の東北隅であることが明らかになった。北魏時代に造営されたのは金墉城丙城だけであるとすれば、文献中の疑問が自然に解決できるだろう。

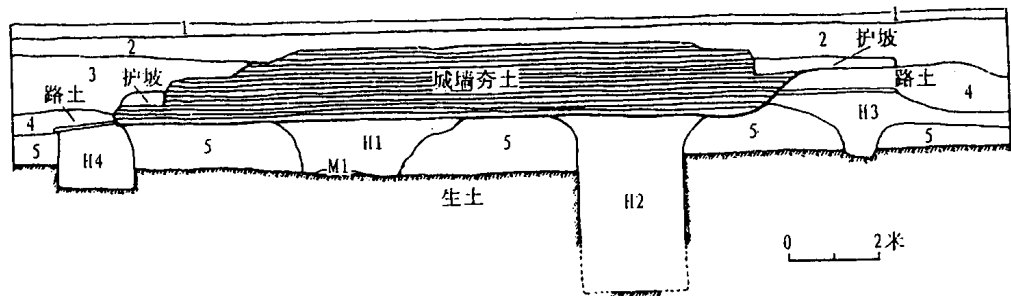
関係する文献から判断すると、金墉城甲・乙城は隋時代末期に李密が造ったものである可能性が最も高いと考えられる⁽¹⁾。金墉城甲・乙城は北魏時代に造営されていないので、北魏洛陽城の第二重目の防衛施設は金墉城丙城のみを含んだと思われる(第四図)。



出土遺物拓本

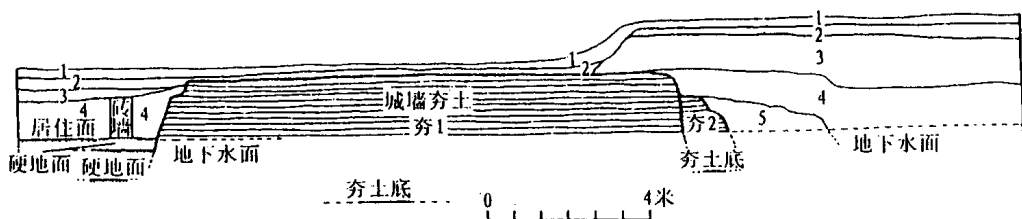
1、4、5. 陶盆残片(97JY 甲 T5 夯土 : 5、97JY 甲 T5 夯土 : 6. 正、背面) 2. 空心砖残块(97JY 甲 T5 夯土 : 4)
3、8. 篋纹面布纹里板瓦片(97JY 甲 T5 夯土 : 10、97JY 甲 T5 夯土 : 8) 6、7. 素面布纹里板瓦头(97JY 甲 T5 夯土 : 7. 正、背面)(1、2、4、5. 约 1/4, 余皆约 1/6)

出土布纹里板瓦片拓本
1. 篋纹面(97JY 甲 T5⑤ : 4) 2. 素面(95JY 甲 T5⑤ : 1) 3. 篋纹面(95JY 甲 T5⑤ : 2.)



甲城西墙 T5 北壁剖面图

1. 灰褐色耕土 2. 黄色近代扰土层 3. 浅黄褐色土 4. 黄褐色土 5. 红褐色土



乙城东墙 T4 北壁剖面图

1. 灰褐色耕土 2. 黄色淤土层 3. 浅黄褐色土 4. 黄褐色土 5. 灰黄色土

図三 金墉城城壁からの出土品とトレンチのセクション図

(『考古』1999年3期より)

二 鄴南城と北魏洛陽城との平面配置の類似点

上述のように、東魏北齊鄴城の造営と北魏洛陽城の廃棄は密接な関係があり、単体の建築から都城の規格において、北魏洛陽城は鄴南城に直接的で深い影響を与えている。北魏洛陽城の内城と鄴南城を比較すると両者のきわめて大きな類似点が明らかになってくる。

以下に述べる北魏洛陽城と鄴南城との類似点は注目に値する。

まず両者の面積はほとんど同じである。文献によれば、北魏洛陽城の内城は南北約九里、東西約六里であり、したがって「九六城」とも称された。ボーリング調査によって、東の城壁の残存長は約三九〇〇メートル、復元長は約四二〇〇メートルであることが確認されている。南の城壁は全て洛河に押し流されている。東西の城壁間の距離から復元すると南の城壁の長さは約二四六〇メートルである。西の城壁の残存部分の長さは約三四〇〇メートルで、復元長は約三七〇〇メートルである。北の城壁は約二七〇〇メートルであり、面積は九・五平方キロメートルである。文献によれば、鄴南城は南北約八里六〇歩、東西六里であるが、考古調査によれば、東西は二八〇〇メートル、南北は三六〇〇メートルで、面積は九・三四平方キロメートルである。

次に、両者の防衛システムは比較的近似している。鄴南城の防衛システムは更に改善されている。鄴南城の防衛システムとしては、城壁、馬面、城門、濠等が含まれる。東、西、南、三方の城壁は真

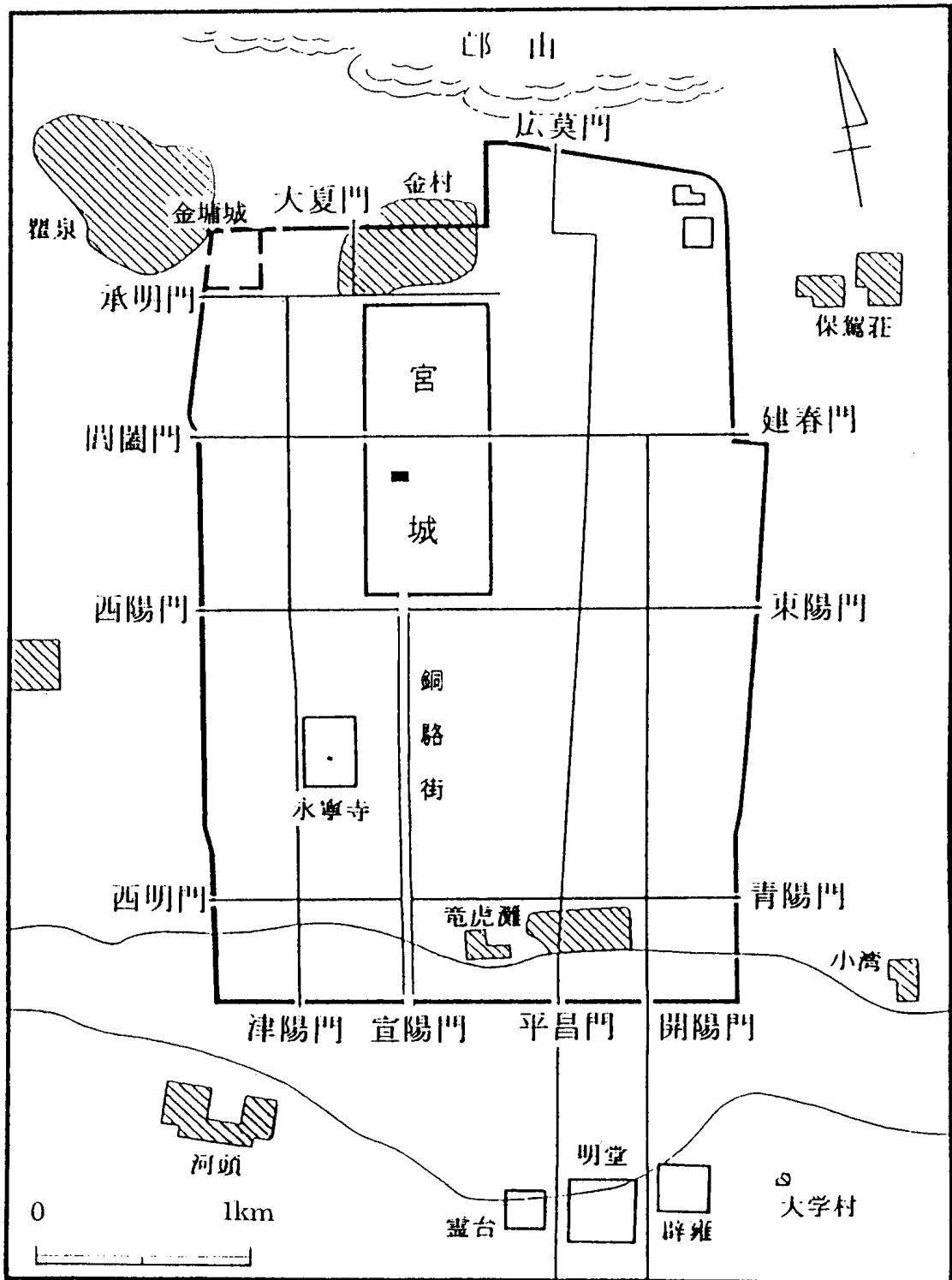
直ぐではなく、やや湾曲している。都城の東南角と西南角も直角ではなく、やや隅丸状を呈する。

鄴南城造営に関しては神龜の伝説があり、文献によれば、鄴南城造営の際に方丈を超える神龜が掘り出され、これが一種の吉祥と考えられ城壁は龜甲形に築造されたという⁽⁹⁾。当時本当に神龜を掘り出したのかは知る由もない。一種のこじ付けで述べているのかもしれないが、緩やかなカーブを描き、こうした龜甲形に近い城壁及び馬面、城壕などは、鄴南城の堅固で実用的な特徴を独自に備えた防衛体制を構成していたことは確実である。

実際に洛陽城内城を観察すれば、城壁の多くが曲がりくねっていることに気づくであろう。無論これは洛陽内城の城壁が長期間にわたって造営が行われたためである。城壁の角の形状は非常に注目される。城壁の西南隅、東南隅は洛河に押し流されているが、現存する城壁の東北隅と西北隅は共に角が丸まっている。もし、北魏洛陽城内城の城壁に見られるこのような現象が、長期に渡る修築と改築の結果として自然と生じたものとすれば、これに防衛上の何らかの利点があったことも明らかであろう。したがって、鄴南城城壁の特徴的な設計は、明らかに無根拠ではなく、北魏洛陽城内城と何らかの関連があるとみてよいだろう。その他、鄴南城の東、西、南の城壁外側には、全て「馬面」が設けられているが、北魏洛陽城内城北の城壁外側にも同様の施設が設けられている。

鄴南城の実用的で堅固な、独特の防衛システムは、これらのもつ

東魏北齊鄴城の内城の成立について



図四 北魏洛陽城内城の平面図
 (王仲殊『漢代考古学概説』より、部分添削)

防衛城的性格をよく表している。このような防衛システムは北魏洛陽城内城のそれと密接な関係を持ち、鄴南城がその性質上も内城に属することを反映している。

三 両者の城内施設の類似点

ここでは、東魏北齊鄴城内城の配置と、宮城、離宮御苑、官署、廟社、府庫、府第里坊などの分布について簡単に考察する。

宮城

鄴南城の宮城は内城北部の中央に位置し、「鄴中記」では「東西四百六十歩、南北連後園、至北城、合計九百歩」と記されている。現在宮城は大半が漳河の河道中にあり、版築の基壇上には砂が厚く堆積し、その構造を詳しく調査することが困難な状態である。ボーリング調査によって、宮城はほぼ長方形を呈し、東西約六二〇メートル、南北約九七〇メートル、宮壁の厚さは約七メートルであると確認された。

鄴南城の宮城は左右対称に計画され、宮城正殿の中軸線および宮城の中軸線と内城の中軸線は完全に一致する。宮城正南城門、宮城前広場、内城正南城門すなわち連体式双闕楼のある朱明門はすべて中軸線に位置する。都城の中軸線は都城計画の中心となった。新しく設計された宮前広場及び朱明門の建築様式は、中軸線上の建築物の唯一、至尊の最上級の封建礼儀を表している。これらは以後の歴代の都城の計画に多大な影響を与えた。

離宮御苑

宮城の北壁と北側の城壁との間の距離は約八〇〇メートルである。文献によれば、この空間は後園であり、万寿堂などの建築がある。残念なことに現在この場所は漳河の河道となっており、遺跡は無くなっている。

官署

鄴南城宮城以南、朱明門大街の両側から、ボーリング調査によって多くの版築基台が確認された。そのうちの一部基壇は規模が比較的大きく、一般の居住遺構とは考え難い。文献には、「尚書省及卿寺百司、自令仆而下、至二十八曹、併在宮闕之南」とある。¹⁰⁾この他、端門大街の東西両側に分かれて大司馬府と御史台があり、宮城の南側に司州牧廨があった。東魏北齊の中央官府は、基本的に宮城以南、朱明門大街の両側に集中して分布する。これは北魏の中央官府が洛陽城銅駝街の両側に分布するのと同じである。北魏洛陽城内城の銅駝街の両側には国家官署の中心区域が形成され、考古学調査により、街道の両側には巨大な建築基台が発見されている。これらの建築遺構は中央官署の御者台左衛府、右衛府、司徒府、大尉府、将作曹、国子学などに属する。

北魏洛陽城や東魏北齊鄴城では中央官署を宮城の南、中軸大道の両側に配し、中央行政機構と宮城を密接に結合した。これは宮廷との緊密な連絡を保持するのに都合がいい。これらの規格には合理性があり、両者の継承関係は明白である。

廟社

天平四年（紀元五三七年）四月に鄴南城では「新廟」を建て、七帝神主は新廟に入った。これはすなわち東魏太廟のことである。⁽¹¹⁾

『鄴中記』の記載によれば、東魏太廟は朱明門大街の東側に位置し、これは「左祖右社」という伝統の中の「左祖」という制度である。

東魏孝静帝が禅譲した後、東魏太廟は北齊太廟に改変された可能性がある。文献に記載される北齊太廟は司州牧廨の南に位置している。このことから、東魏太廟と北齊太廟との関係は明確ではないとはいえ、鄴南城での太廟は中央官府の南に位置することがうかがえる。

これは北魏洛陽城の廟社の位置と一致する。北魏洛陽城の太廟、太社は銅駝街の東西両側、中央官署の南端にあり、祖廟と社稷は中軸線の左右両側にあり、その位置は対称的で、これは「左祖右社」の王城の規格の伝統を重んじたものとなっている。都城中軸大道の両側、中央官署区の前に太廟と大社を置く規格は内城の位置づけ上非常に重要である。この設計思想はさらに太廟、太社の象徴的な意義を加えている。鄴南城はまさにこの設計思想を継承している。

府庫

東魏北齊鄴城の府庫に関しては、現在までに考古学的な発見はされていないが、地名学から得られた手掛かりは注目に値する。

鄴南城宮城東南には劉太昌村と呼ばれる村があるが、文献によれば、⁽¹²⁾清光緒年間以前には劉太昌村は太倉村と称されていた。宋代の『相台志』の記載によれば、⁽¹³⁾宋代に太倉村という村があり、その

東魏北齊鄴城の内城の成立について

村は宋代の鄴鎮に位置し「東南七里、魏所置、今其窖尚存」とある。宋代の鄴鎮は今の香葉宮郷鄴鎮村であり、劉太昌村は鄴鎮村の東南約三キロメートルの所にある。つまり、宋代の太倉村は現在の劉太昌村であり、この村の付近には当時、東魏北齊時期の窖穴遺跡が残っていた。この窖穴が東魏北齊鄴城の府庫——太倉であろう。現在の劉太昌村は、鄴南城宮城前の東西大道の南側、東の城壁の内側に位置し、村の北側は漳河の南堤に接する。太倉村は現在の劉太昌村よりも北にあったが、後に漳河の氾濫のためにやや南に移ったと推測される。北魏洛陽城の太倉は宮城の東南、東陽門大道の北側に位置し、また東陽門外の「租場」と合わせて一つの倉廩区を形成していた。鄴南城宮城とこのような位置関係にある場所は、現在の劉太昌村の位置と極めて近い。これは偶然の一致ではなく、東魏北齊鄴城が北魏洛陽城を継承したことによる当然の結果である。これによって鄴南城太倉の位置は宮城前の東西大道の北、内城の東の城壁より内側に位置していたと推測できよう。

府第里坊

『鄴中記』の記載によれば、鄴南城内の住宅は等級が高く、全て達官顯貴の府第であった。またその全てが内城の南半部、すなわち宮城前の東西大道以南に存在していた。例えば、朱明門大街の西側にある北齊録尚書事⁽¹⁴⁾和士開邸、東魏尚書元文遙邸、啓夏門内にある北齊儀同三司劉臻邸、宮城西南、御史台の南部にある昌黎王韓長鸞邸、高昌王劉龍虎邸などがそうである。これまでに、鄴南城内に一

般庶民が居住していた証拠は見つかっていない。これもまた北魏洛陽城内城と同じである。北魏洛陽城の東陽門・西陽門大道が内城の重要な境界線であり、この大道の北側は地形的に比較的高い。この内城の北半分は広義の宮苑区に属し、非常に少数の皇族や権臣等が居住した延平里の他にも宮城、禁苑、武庫、太倉などが分布していた。一方東陽門・西陽門大道の南には主に官署、祖廟、祖社、寺院、貴族の邸宅などが分布しており、『洛陽伽藍記』には延年里、永和里、宜寿里、永康里などは「皆高門華屋」「当時名為貴里」と記載されている。

鄴南城の平面配置および城内施設の性質などから判断して、鄴南城は東魏北齊都城の内城であると断定してもよいであろう。

三、朱明門の源流と性質

一九八六年に発掘された鄴南城真南の門である朱明門遺跡は、鄴南城が内城であることを示している。朱明門遺跡は壮大であり、全城内で唯一の双闕式城門である(第五図)⁽¹⁴⁾。城門の中で南壁の中心にある朱明門の格式が最も良く、規模が大きく、城門の上には城楼があり、「東西二四門、朱柱白壁、碧窓朱戸、仰宇飛檐、五色晃耀」⁽¹⁵⁾と記載されている。またその建築形式は双闕式城門の変遷の上でも重要な意味をもつ。発掘により、朱明門は三条の門道を持ち、城外の両側に大きな闕楼があったことが分かっている。⁽¹⁶⁾

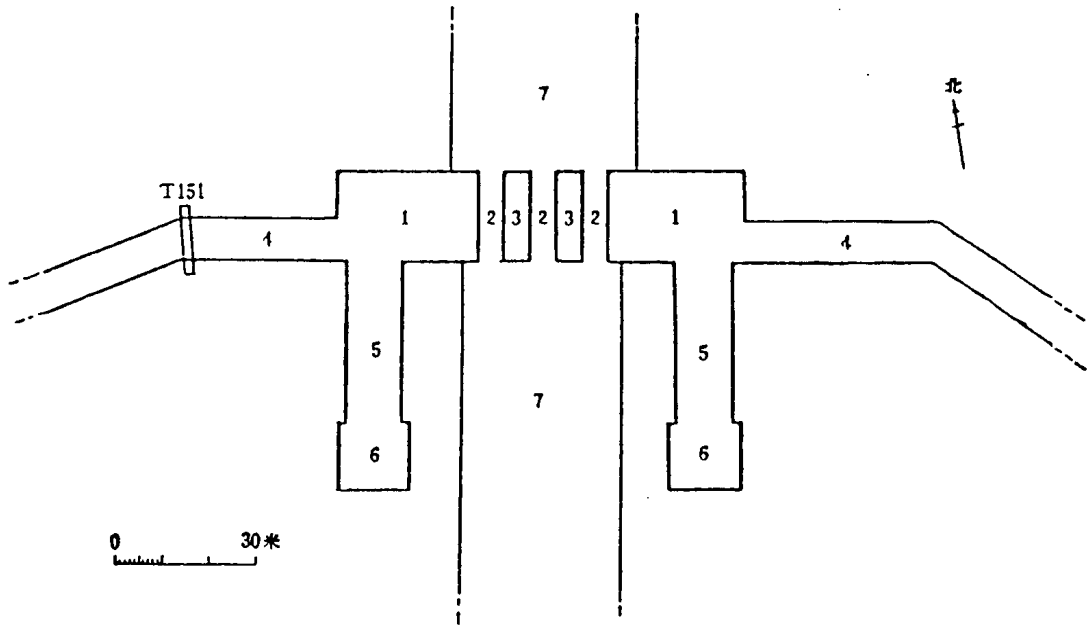
ここでは、漢代から隋唐代に至るまでの双闕式城門の形態と応用について考古学資料を総合し、双闕式城門の変遷の規則を整理し、朱明門の位置付けと鄴南城内城の性格について分析する。

これ以前の時代で、これまでに外郭城城門に闕楼を建てる実例は見つかっていない。この方面に関する明確な記録も無い。東周時期の作品『詩・子衿』に「挑兮達兮、左城闕兮」という句があるが、ここでの「城闕」とは一般的に城門の外側の闕楼であろうと考えられている。⁽¹⁷⁾

前漢長安城建章宮東宮門外の鳳闕遺跡は、残高が一〇メートル以上あり、これと宮門とは接続していない。これは独立式双闕楼の形態に属し、文献に記載される鳳闕は高さが二五丈である。⁽¹⁸⁾ 漢長安城の未央宮や、長樂宮、建章宮などは東門を正門とするが、東宮門外に双闕を設ける点が共通しており、このことは双闕楼の建築形式には儀礼的な機能が含まれているということを物語っている。⁽¹⁹⁾

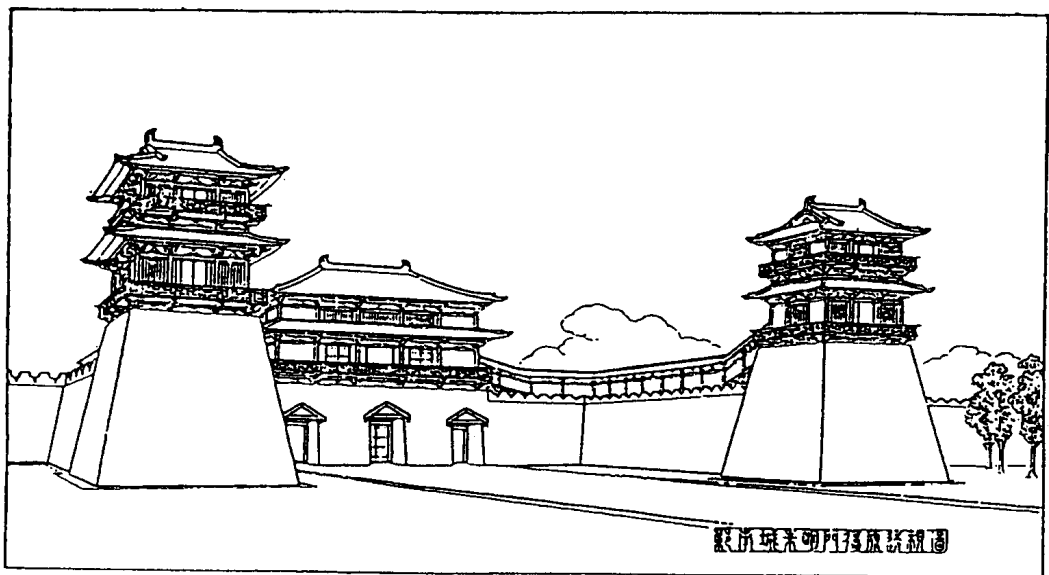
後漢雒陽城にも宮闕があり、後漢の朝会や官員による上書、拜謁の要求などは全てここで行われ、真南の宮門から宮城内に入った。⁽²⁰⁾ 北宮朱雀五闕は、北宮真南の門である朱雀門の付近であったと推測される。⁽²¹⁾ 魏晉洛陽城でも城闕が設けられていたが、『元河南志』と『晋書』などの文献の記載によれば、「洛陽十二門、皆有双闕」の状況であった。漢魏故城の考古学的ポーリング調査によって、漢中東門(北魏東陽門)、漢夏門(北魏大夏門)、漢上西門(北魏閭闔門)などの城門外からは全て城闕遺跡が確認されている。両側に配され

東魏北齊鄴城の内城の成立について



朱明門門址平面図

- 1.門墩 2.門道 3.隔墻 4.城墻 5.短墻 6.阙台 7.大道



九七

図五 鄴南城朱明門の平面図と復元図

(『考古』1996年1期より)

る版築基址は大きなもので二二×一五メートル、小さいもので一〇平方メートルである。⁽²²⁾漢魏故城の城闕の中で最も早い時期のものとしては、後漢時期に建造されたものもあるようだが、それは今後の発掘調査によって実証されることが期待される。確実に言えることは、北魏時期の城闕は依然として独立式双闕楼であり、北魏洛陽城内城の城門に普遍的に闕楼を設けるだけでなく、従来の建築様式を踏襲しており、外郭城（あるいは羅城）の城門には双闕楼は設けられていない。このことは、北魏都城が城闕制度の方面では変化がなかったことを意味する。

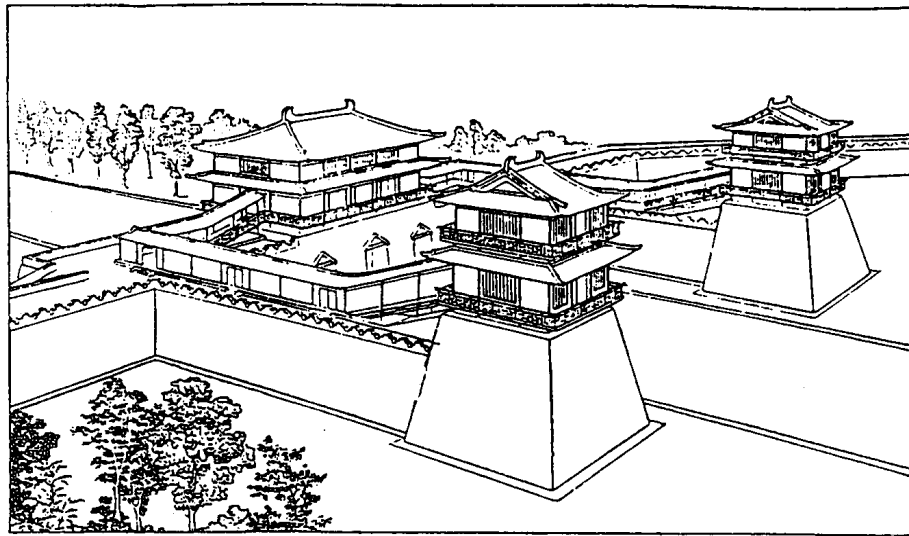
鄴南城では闕楼を使用した城門は朱明門だけであり、その形式は、もはや独立式双闕楼ではなく、城門と闕楼は行廊でつながれて一体となり、連体式双闕楼城門の構造になっている。東西の闕楼間の距離は五六・五メートル離れ、行廊の長さは約三四メートル、東西の闕楼の基台は約二二五平方メートルである。城門の版築基台の全範囲は東西で八四メートル、南北で約七〇メートルに達する。朱明門の前面は闕楼と城門の三面の壁を組合せた空間を形成しており、その面積は二八〇〇平方メートル近くである。これにより城門の防衛機能が增强されると同時に、内城真南の城門の儀礼的色彩も顕著になってきた。遺構の状況から鄴南城宮城真南の門も、連体式双闕楼城門の建築形式であった可能性がある。⁽²³⁾『鄴中記』の記載によれば、鄴南城宮城は「表里合二十一闕、高一百尺」であり、この二一基の宮闕が宮壁に付属したかどうかは不明である。これは考古学調査に

よって確認するほかはない。これまでの考古学資料から言えば、東魏北齊鄴城は最初に連体式双闕楼城門を使用したことになり、またそれは真南の城門と宮城の真南の門に限られる。これによってその儀礼的機能は非常に際立ったものとなっている。

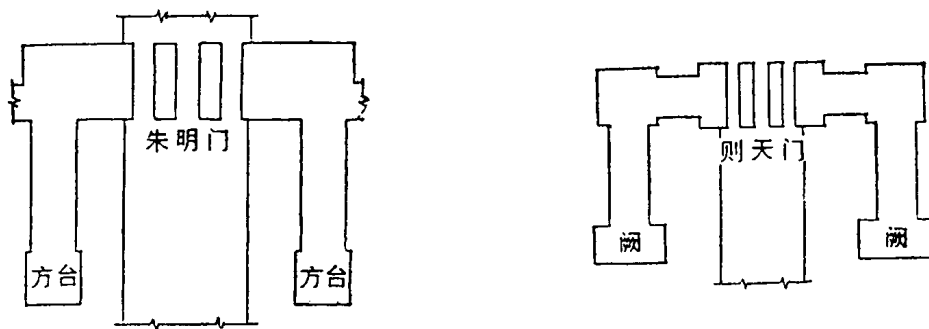
隋唐長安城と隋唐東都洛陽城においても、双闕楼式城門あるいは双闕楼式建築はあるが、今日にいたるまでそれらは宮城の正門と正殿にだけ見られ、その建築形式は朱明門と同じ連体式双闕式である。例えば隋唐東都洛陽真南の宮門である応天門（隋の則天門）、唐大明宮正殿である含元殿がそうである。中でも東都洛陽城の応天門遺跡と朱明門の形状は非常に近似しており、両者の継承関係は疑いようも無い。⁽²⁴⁾発掘調査の結果に基づいて推定すると、応天門台基は東西約一二〇メートル以上、南北約六〇メートル以上に達する。その東西長は朱明門よりも長い。応天門は宮城の真南の門であるが、これは宮前広場の必要性に應じるためである。含元殿は唐大明宮の正殿であり、大殿の東西両側にはそれぞれ翔鸞閣、栖鳳閣があり、當時は「双闕」とも称された。その基本的な建築形式は依然として鄴南城の朱明門を継承するものであるが、両閣の間は約一〇〇メートルの距離があり、規模は更に雄大になっている。⁽²⁵⁾

双闕楼式城門または双闕楼式の建築は、隋唐時期においては封建礼制上で最高格の建築である。都城プランにおけるこのような制度は、東魏北齊時期にその基礎が形成され、隋唐時期にそれが継承されて発展した。⁽²⁶⁾明清の北京城宮城真南の門である午門に至るまで、

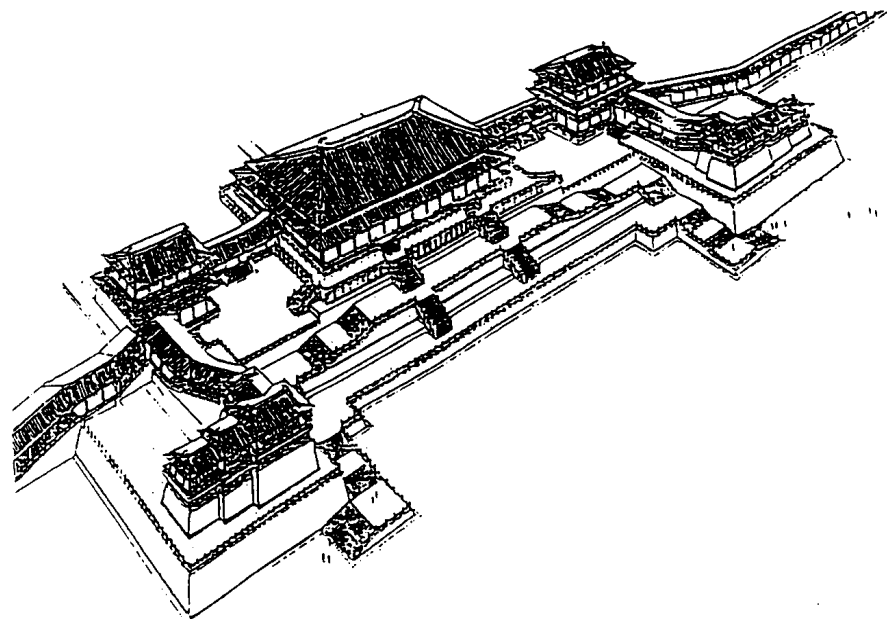
東魏北齊鄴城の内城の成立について



東魏北齊朱明門復原図



東魏北齊朱明門（左）隋唐則天門（右）平面図



唐大明宮含元殿復原図

その建築形式は応天門、含元殿のものを連綿と継承しており、連体式双闕楼城門である。ここに朱明門の建築様式の影響の深さを見ることができる(第六八図)。

南北朝以前の歴代の都城を通観してみると、外郭城の城門外に双闕楼を設ける実例は見られない。東魏北齊鄴城以降の都城の中で連体式双闕楼城門が使用される状況から判断すると、朱明門の建築形式は明らかに最高の封建儀礼の等級を表しているものといえよう。朱明門は外郭城の城門ではなく、したがって現在の鄴南城遺跡は内城であることは明確であるといえる。

四、余 論

以上のように、鄴南城の平面配置、都城内の施設およびその属性から、鄴南城遺跡の内城的性質について論証を行ってきた。鄴南城の内城の問題が明らかになると、鄴南城の外郭城の問題が浮き上がってくる。わずかな文献の記載に注意を払い、十数年来の考古学の発掘調査資料とを総合して、鄴南城の内城の外側に外郭城が存在することが推定できるようになった。ただしなお多くの考古学的な調査が必要であり、このことに関しては今後論証していきたい。

東魏北齊鄴城の内城は、その配置において北魏洛陽城の都城プランを継承、発展させ、隋唐長安城の皇城出現の基礎を作った。実際、北朝の都城において、内城の中軸線となる大道の東西両側に太廟太

社を配するプランが「左祖右社」配置の伝統に基づいている点や、内城の中軸線である大道の両側に行政中心地区が集中する効果、内城北半部が宮城に付属する空間へと変遷する事実など、これらは全て隋大興城に対して直接的な影響を与えている。

隋文帝の大興城における皇城制度は、間違いなく直接的に北魏洛陽城の内城、東魏北齊鄴城の内城の造営手法を参考に行っている。北朝都城の内城はまさに古代中国における都城の皇城の祖型なのである。

日本語校正については、早稲田大学考古研究室の岡内三眞先生、後藤健氏、宮里脩氏などの協力を頂きました。記して感謝いたします。

註

- (1) 『北齊書・帝紀第二・神武下』、中華書局、一九八三年
- (2) 『北齊書・高隆之伝』。
- (3) 『北齊書・李業興伝』。
- (4) 『資治通鑑』卷一五七・「梁武帝大同元年」条。
- (5) 中国社会科学院考古研究所等「河北臨漳縣鄴南城遺址勘探与発掘」、『考古』一九九七年三期。第二七頁。東西を約二七〇〇メートル、南北を約三四六〇メートルとして計算すると、鄴南城の面積は九・三四平方キロメートルとなる。
- (6) 明・崔銑『嘉靖彰德府志』・卷八・『鄴都宮室志』引『鄴中記』
- (7) 『隋書・李密傳』、『旧唐書・李密傳』
- (8) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城工作队「漢魏洛陽城初步勘査」、『考古』一九九三年第七期を参照。北魏洛陽城の城壁の長さ

は直線距離ではなく、城壁自体の長さである。『中国大百科全書・考古卷』によると北魏洛陽城の内城の面積は九・五平方キロメートルとなっている。

- (9) 明・崔銑『嘉靖彰德府志』・卷八・『鄴都宮室志』引『鄴中記』
- (10) 『嘉靖彰德府志・鄴都宮室志』引『鄴中記』
- (11) 『魏書・孝静帝本紀』
- (12) 一、清・盧崧『彰德府志』、乾隆五十二年刻本。
二、清・周秉彝『臨漳縣志』、光緒三十年刻本。
- (13) 『永樂大典』卷七五〇六引『相台志』：「太倉：臨漳縣、在鎮東南七里、魏所置、今其窖尚存。」
- (14) 中国社会科学院考古研究所等「河北省臨漳縣鄴南城朱明門遺址的発掘」、『考古』、一九九六年第一期
- (15) 『嘉靖彰德府志・鄴都宮室志』引『鄴中記』
- (16) 『考古』、一九九六年第一期を参照。
- (17) 『詩經』孔穎達疏：「在城闕兮、謂城上別有高闕、非宮闕也。」高亨『詩經今注』：「闕、城門兩邊的高台。」

(18) 『三輔黃圖』卷二引『三輔旧事』：「建章宮周回三十里、東起別鳳闕、高二十五丈、乘高以望遠。又于宮門北起岳圓闕、高二十五丈、上有銅鳳凰。」

- (19) 『漢書・宣帝紀』『史記・高祖本紀』
- (20) 『續漢書・百官志』：衛尉所屬公車司馬一人「掌宮南闕門、凡吏門上章、四方貢獻及征詣公車者。」
- (21) 『續漢書・禮儀志(中)』劉昭注引『漢儀』。
同注二一。
- (22) 鄴城考古隊のボーリング調査の資料による。
- (23) 洛陽市文物工作隊「隋唐東都應天門遺址発掘簡報」、『中原文物』、一九八八年第三期。
- (24) 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊「唐大明宮含元殿遺址一九九五—一九九六年発掘報告」、『考古學報』、一九九七年第三期。
- (25) 隋唐政治制度と北朝の關係に關しては、陳寅恪『隋唐政治制度淵源略論稿』、三聯書店、一九五四年および『魏晉南北朝史講演録』、黄山書社、一九八七年を参照。
- (26)